

○淡路島の花き生産は、生産者の高齢化、販売価格の低迷、生産資材価格の高騰により、栽培面積は減少している。

○このため普及センターでは、淡路ストックの二期作栽培とオリジナル品種の生産を拡大し、10月～翌年6月の長期安定出荷と市場性の高い商品の生産拡大を図った。

○その結果、ストック販売額は増大し、販売総額1.2億円の産地となった。また、年間安定した労働配分と収益確保が可能となった。

### 具体的な成果

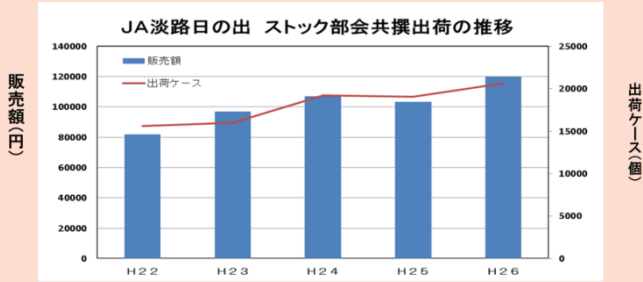
#### 1 ストック販売額の増大

(H22～H26：作型は年度をまたぐ)

■全国の花き産地が衰退するなかで、ストック部会の出荷量は少しずつではあるが、増加しており、実需者の期待に答える産地として評価されている。

①販売総額：0.8億円⇒1.2億円。

②平均単価：58.8円／本⇒70.6円／本。



#### 2 経営転換の成功と担い手の育成

■淡路島のカーネーション産地において、外国産の輸入増加や燃油高騰からストックへの効果的な経営転換により、経営改善が実施できた。

①ストック栽培に4戸が作物転換した。

②ストックへの転換で一気に借入金返済額が半額となり、資金繰りが改善した。

③ストック栽培を基幹とした経営で年間安定した労働配分と収益確保が可能になった。

### 普及指導員の活動

平成23～27年度

■グループでの品種開発

淡路ストック研究会（現あらせいとうの会）を支援し、有望なオリジナル品種を開発した。

平成26～27年度

■トンネル栽培による抑制技術開発

低温期の草丈を確保するため、長野県で開発されたトンネル栽培技術を普及した。

平成27年度～現在

■電照栽培を利用した促成技術の確立

全国的に事例の少ないLEDを利用した開花調整技術で、年内に安定して出荷するため、効果を確認し、普及している。

### 普及指導員だからできたこと

■目標達成のための課題化

生産者と関係機関へ淡路島ストックの生産の増大と品質向上の必要性を働きかけ、産地全体で収益性の向上、担い手の育成、雇用の確保等の課題を共有した。

■関係機関との連携

普及センターが働きかけながら、生産者を支援についてJA淡路日の出と協力して取り組み、技術開発については試験研究機関に要望し、淡路農業技術センターと生産者、関係機関情報交換を重ねながら開発技術の普及に取り組んだ。

## 二期作栽培の作期拡大による淡路ストック産地の発展

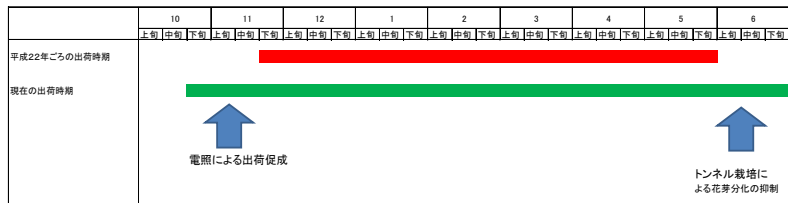
活動期間：平成23～継続中

### 1. 取組の背景

北淡路農業改良普及センターは、兵庫県淡路島の北部に位置する淡路市を管轄し、管内では温暖な気候と急峻な地形を生かしてカーネーション、ストック、キクなどの施設花きの生産が行われている。

管内のストック栽培は昭和10年代から始まり、関西花き市場で高い評価を得ている。近年、ストックは葬儀用スタンド花の縦ラインを演出する商材として、平均単価は70円/本（27-28年度作）と高値で安定している。この需要に応えるため、ストック部会は二期作栽培に取り組み、他の産地では真似のできない長期出荷（10月下旬～翌年6月まで）を実現している。

現在、JA淡路日の出ストック部会は生産者戸数27戸、施設面積6.7haで、生産者が高齢化する一方、3名の若手



後継者が就農し活躍している。

図1 淡路ストックの出荷時期の変化

この淡路島特有のストック産地に対して次の課題に取り組んだ。

#### (1) 安定した二期作栽培による長期出荷技術の確立

- ア 年内に安定して出荷できる技術の導入
- イ 低温期における草丈の確保
- ウ 6月に販売できる技術の確立

#### (2) 産地の拡大目標の明確化と関係機関の連携

「淡路ストック販売高150%化」を謳い、総販売額1.5億円を目指し、関係機関が協力して目標達成のため体制づくりが必要。

### 2. 活動内容（詳細）

#### (1) 革新的技術の導入

##### ア 電照栽培を利用した促成技術の確立

ストックは量的長日植物であるため、電照栽培により開花が促進される性質を持つ。そこで、普及センターは、近年、LEDを利用した開花調整技術の実証ほを設置し、白熱灯と昼光色LEDの電照効果を検討した。

その結果、白熱灯により開花促進、草丈伸長に効果があった。この技術であれば植物成長調整剤を使用しなくても、促成栽培が可能となった。

##### イ トンネル栽培による抑制技術開発

低温期の草丈を確保するため、当普及センターは、高冷地である長野県で開発された技術ではあるが、実証ほを設置し、効果を検討した。

この技術により淡路オリジナル品種に2月定植、3月定植どちらにおいてもトンネル被覆にて開花が6～7日遅れ、草丈、葉枚数が増加する傾向にあり、本品種においてはトンネル被覆により秀品率が向上した。

## ウ 晩生品種の開発による6月出荷の実現

ストック部会では白の晩生系統で茎の硬い系統を見出し、普及センターは技術支援しながら、平成23年より6月下旬まで安定した品質を維持できる品種として「淡路ホワイト」と名付け、生産を行っている。この品種の導入で6月までの長期出荷が可能となった。

### (2)産地を支える組織体制の整備

普及センターは、JA淡路日の出と生産状況を緊密に情報交換しながら、ストック部会内の有志で結成された淡路ストック研究会（現あらせいとうの会）によるオリジナル品種の生産支援や八重鑑別研修会、出荷目合わせ検討会等の研修会を定期的に行い、実需者の意向を的確に把握しながら、生産に取り組める環境整備を行っている。

生産技術指導は普及センター、出荷販売指導はJAと役割を分担し、他産地に優位に立ち、高単価で販売するための技術支援、集出荷体制を確立している。

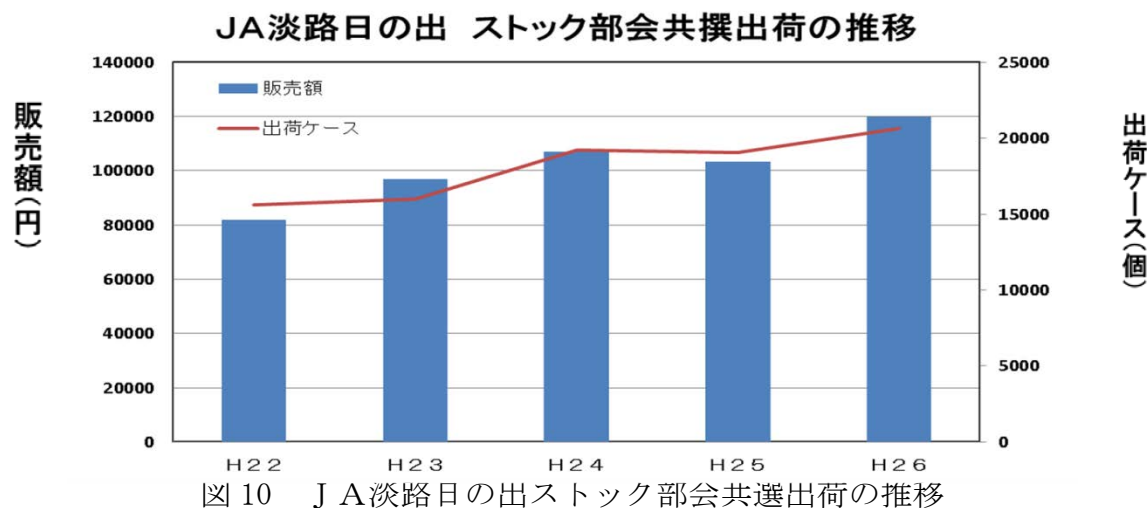
一方、ストックの高品質化や開花促進についての技術開発を試験研究機関に要望し、淡路農業技術センターが研究をすすめた。この間、生産者と関係機関が研究ほ場や現地実証ほ場を巡回し、情報交換を重ね、開発技術の普及に取り組んだ。

## 3. 具体的な成果（詳細）

### (1)ストック販売額の増大

平成26～27年は169.7万本の出荷を達成し、販売総額1.2億円の産地となった。平均単価は70.6円/本となり、実生の切花としては高い単価を維持している。

全国の花き産地が衰退するなかで、ストック部会の出荷量は少しずつ増加しており、実需者の期待に答える産地として評価されている。



### (2)経営転換の成功と担い手の育成

当普及センター管内には全国3位の出荷量を誇るカーネーション産地を有するが、平成20年から円高基調が顕著となり、平成23年～24年度にはコロンビア産のカーネーションの品質が向上し輸入量が増加した結果、販売額が下落したことに加え、燃油価格が高騰した。これらのことがカーネーション経営を圧迫し、カーネーション産地を経営継続に対する不安の陰が覆った。

そのような中、燃油代等の生産コストが低廉であることと販売単価が比較的安定しているストック栽培に作物転換したカーネーション農家が4戸現れた。

流動経費のうちカーネーションにおける種苗費の割合は 32.1%であるのに対し、ストックのそれは 12.3%であり、また、暖房費の占める割合はカーネーションで 18.1%、ストックでは 0.0%であるため、ストックへの転換で一気に借入金返済額が半額となり、資金繰りが改善し、経営が安定した。

この中には、将来の産地を担う若手農家もおり、ストック栽培を基幹とした複合経営による年間安定した労働配分と収益確保が可能な経営モデルを目指している。

#### 4. 農家等からの評価・コメント（淡路市尾崎 S氏）

淡路島全体でストックの生産拡大へ向けた取組を関係機関のまとまった技術支援等によって実現できた。今後は、産地を担う次世代の担い手を応援し、有望な人材を待つのではなく、生産者が新たな仲間を作っていくのを支援し、担い手を確保していきたい。

#### 5. 普及指導員のコメント

##### （北淡路農業改良普及センター・普及主査・石川順也）

ストックにはこれまで開花調節技術はなく、もっぱら早晩性品種の組み合わせと播種期を移動させることが安定供給技術だとされていた。

ストックの長期出荷を実現している淡路島のストックは、既存品種をしっかりと生産することが高単価に結びついており、オリジナル品種をさらに経営に生かせるよう商品開発も併せて需要を生産者側から提案するよう支援していく。

#### 6. 現状・今後の展開等

産地の目標として「淡路ストック販売高 150%化」、「総販売額 1.5 億円」を目指し、関係機関が一体となって以下の内容に取り組んでいく。

##### (1) 実需者に信頼される安定した出荷体制の確立

近年は異常気象が続き、花き市場においても特にスタンダードストックは開花調節が困難な花材だとされている。カーネーションでは温度や日射量の積算から開花予測モデルが完成している。それらを応用しながら、兵庫県立農林水産技術総合センターや I T 関連業者と連携し、ストックの出荷予測システムの開発をすすめている。このシステムに基づいて生産者ごとにストックの播種日を提案し、産地として切れ目のない出荷体制を構築していく。

##### (2) オリジナル品種の P R とさらなる改良

現在のスタンダードストックの利用方法は葬儀におけるスタンド花（供花）としての利用が主流である。当産地は他産地の出荷が弱まる 5 月から 6 月にも供給が可能であるため春のブライダル需要を喚起することが重要になる。その際には有色系品種、覆輪品種、染め物花材などが必要になるので、当普及センターはそれらの商品開発も併せてブライダル需要を生産者側から提案するよう支援していく。

##### (3) 新たな担い手の育成

淡路市には阪神間在住で就農を志望する者がよく相談に訪れるが、当普及センターは有望な人材を待つのではなく、生産者が新たな仲間を作っていくのを支援し、担い手を確保していきたい。そのためには淡路花卉連の青年部等の活動として新農業人フェアなどに新規就農者を募集する出展を支援したり、新規就農者を育成する「親方農家」の登録推進、あるいは空き温室の情報整理をより一層すすめる必要がある。